

マツムラ電子工業株式会社

当社は、祖父が大正9年に創業。母が2代目、私は3代目になります。祖父は鉱石ラジオを開発したり、無線機の製造など作り出すことが好きで、発明特許も数多く取得しました。本社所在地だけは変えるな、という祖父の命で、事業規模も社員数も拡大しても生野区に本社を構えています。

当社が事業展開するエレクトロニクス業界は、技術革新やグローバル化のスピードが速く、競争の激しい業界です。その中において、創業100年を迎えることができたのは、「品質は命、価格は米、納期は力」という経営理念を徹底しているからです。品質、価格、納期を強みに、お客様の要望にも小回りを利かせて対応。ある大手家電メーカーの仕事では、毎月、下請けの品質ランクが評価されるのですが、常時1位を獲得。医薬品メーカーの仕事では、16社の競争の中から、工場監査で当社に決めいただきました。当社は、あくまでメーカーの黒子。小回りのききやすい規模だからこそ、使っていただきやすいんだと思います。だからこそ、お客様のため、そして世の中のために、もっと役に立つものを作りたいと考えています。

創業100年という区切りを迎え、
これからの100年は、長年培ってきた技術力を活かし、
受注委託企業ではなく
創造型提案企業に生まれ変わりたいと考えています。

**創業100年を迎え、次の100年で
新しい価値を提供していきたい**

自社ブランド品の
企画製造にも取り組み、
今後も新しい挑戦を
社員とともに続けていきます。

開発技術部 主任
松村幸大さん

代表取締役社長
松村智香さん

業務部
松村尚智さん



電化製品などに使用される 電子基板を製造

2020年に創業100周年を迎える企業がある。それが、電子機器の製造受託（electronics manufacturing service略してEMS）を行うマツムラ電子工業だ。創業者は現社長の祖父である松村安蔵さん。安蔵さんは根っからの職人気質で、1924（大正13）年に鉱石ラジオという回路の一部に鉱物を使ったラジオを開発。1934（昭和9）年には、すでに携帯電話の開発を試みていたというから驚く。

終戦後から電気機器の受託製造を行っていたが、現会長の松村安子氏が事業を受け継ぐと、電気から電子へと大きく舵を切った。それが、あらゆる電子機器に必要なプリント基板の製造だ。その受託生産が時代とともにニーズが拡大し、現在でも同社の主力事業になっている。

当初、手作業でプレート基板を製造していたが、「プリント基板は量産品で、装着部品が多いのに手作業で製造する時代はすぐに終わる」といって早く機械化へと転換。1981（昭和56）年に日本のメーカーで初めて、米・ユニバーサル社の電子部品自動挿入機（実装機）を導入。当時で2億円という巨額の投資だったが、この決断が同社の発展を加速させることになった。というのも、同時期に大手家電メーカーが電子レンジを開発中で、電子レンジに必要なプリント基板の協力会社を探していた。そこに、マツムラ電子が実装機を所有していることを知り、電子レンジのプリント基板すべてを同社が請け負うことになった。

その後、プリント基板だけでなく、ガス自動検針装置（NCU）の生産も受託。さらに、任天堂「ファミコン」の基板も受託することになり、ファミコンの完成品まで手掛ける工場を建設するまでに成長した。ベトナム工場にも国内と同じ構成のラインを設置し、海外での生産の要望にもいつでも応えられる体制を整えている。

同社には、大きな目標がある。それは、自社ブランド製品をつくることだと言う。すでに、電源ケーブルを使わず、接触せずに電力を送るワイヤレス給電の商品開発に着手しているそうだ。生産技術を持つEMSの枠にとどまらず、世の潮流を読み、新たな挑戦を今後も続ける同社に目が離せない。

マツムラ電子工業株式会社

<http://www.matsumura-el.co.jp/>
〒544-0011 大阪市生野区田島5-4-22
TEL:06-6757-5231 FAX:06-6754-2825

事業内容／電子回路プリント基板の設計・実装・完成品組立、産業機器製品の制御基板の組立・製造
電子機器検査治具設計・製造

戦時中には、軍務用の無線通信機の製造が多かった。

印刷基板は、電子部品をプリントして使用する。

プリント基板とは、樹脂などのプレートの基板に電子部品や集積回路を取り付け、配線をつないだあらゆる電子機器に必要なもの。

電子レンジの基板をやっていた時は、年に4回、ボーナスを出していた。儲かったものは社員に還元するのは当たり前。

紙幣鑑別機や、火災警報器の設備にも関わっています。

2016年に「大阪ものづくり優良企業」の優良企業賞を受賞するなど、これまで数々の賞を受賞。

我が社の
自慢

外国人研修生に 浴衣をプレゼント！

ベトナムからの研修生は、すでに250人以上受け入れている。外国人研修生もわが子と同じ。そんな人を大切にする考えから、その研修生に、浴衣をプレゼント。研修生は社長のことを「お母さん」と呼ぶなど、深い信頼関係を築いている。